

## 黙示録4章4-11節 「天の御座」パート②

### 1A この後に起こる事 1

### 2A 神の御座 2-7

1B 座っておられる方 2-3

2B 二十四人の長老 4-5

3B 四つの生き物 6-7

### 3A 礼拝 8-11

1B 永遠に生きておられる方 8-9

2B 栄光と誉れと力 10-11

## 本文

黙示録の学び 4 章に入っています、今回は、1 節から 3 節、使徒ヨハネが開かれた天に、引き上げられて、神の御座の幻を見たところで終わりました。主が天におられ、そこに座しておられるというのが、すべてのすべてと言ってよいでしょう。なぜなら、万物はこの方によって全て支配されていることを示しているからです。そして 4 節以降、その御座の周囲でどうなっているのかを見ていきます。改めて、4 章全体を読みます。(本文を読む)

礼拝を受けるべき、この方に礼拝を献げている姿を見えています。二十四人の長老と四つの生き物がいますが、これからの黙示録の展開は、天における情景と地上における神の裁きが、交互に出てきます。その天の情景のところ、主にひれ伏し、賛美を献げる姿があります。私たちキリスト者はしばしば、「何をするか？というよりも、どうあるべきか？が問われている」と言われます。自分が神のために何をすべきか？ということも大事ですが、それらはいくまでも応答としての行為であり、すべての源は、主の前にひれ伏しているところから流れ出てくるのです。流れを見ることも大事ですが、それ以上に、自分自身が源につながっているということが何よりも大事です。

### 2B 二十四人の長老 4-5

<sup>4</sup> また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。

御座には宝石のような輝きがありましたが、その周りには二十四の座があります。そして、座には、長老たちが座しているのですが、彼らはそれぞれ白い衣をまとっています。そして頭に金の冠をかぶっています。

「座」に着いているということは、彼らには権威と力が与えられていることが分かります。この 4

章の手前、3 章には、ラオディキアにある教会の勝利を得る者たちに対して、イエス様は、「3:21 わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」とあるように、です。

そして、彼らは「長老」です。聖書では、人々を治める指導者です。イスラエルの民にも、教会にも長老がいました。そして出エジプト記には、モーセが契約の血をイスラエルの民に注いだ後に、長老たちとともにシナイ山に上ったことが書かれています。24 章 9-10 節ですが、こう書かれています。「それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は登って行った。10 彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。」イスラエルの民は神がおられる御座のところで、御足の下の方で見ました。その他の描写も、この天の情景と基本的に同じです。

黙示録の最後、神の都である天のエルサレムにおいて、都の建造物にイスラエル十二部族と、十二使徒の名が刻まれています。城壁の門が東西南北あり、それぞれの方角に三つの門があり、それぞれの門に部族の名が刻まれています。イスラエルの十二部族と、教会の十二使徒が神の民の代表的存在です。ですから、ここで二十四人の長老たちは、イスラエルと教会を代表し、神の民を代表していると考えてよいのではないかと思います。

彼らは「白い衣」を着ています。黙示録の中で白い衣を着た人々は、小羊の血によって洗われたので白くされているとあり(7:14)、罪を贖われ、義を身にまとった人々です。そして、冠をかぶっていますが、スミルナの教会やフィラデルフィアの教会に、冠を与える約束をイエス様がしています。王冠ではなく、競走によって獲得する選手の冠のような冠です。スミルナの教会や、使徒たちの手紙に、冠が報いとして与えられることがたくさん書かれていましたね。

そして、「二十四人」という数字は、歴代誌第一 24 章に出てきます。祭司たちが組になって分けられており、その組の数が 24 になっています。教会は、「祭司の王国」と1章で呼ばれていましたから、これらが、地上から贖われた者たちを代表していることが分かります。祭司たちが聖所に入り、神を礼拝し、その祝福をもって人々に恵みを分かち合うのと同じように、天において神の周りにいて礼拝を献げ、そしてキリストと共に地上を統べ治めるようになります。

この長老たちの務めを理解するのに、ルツ記における出来事は参考になります。モアブ人ルツが、姑ナオミについて言って、ベツレヘムに行きました。そして、そこでの有力者ボアズの目の留まり、ボアズがルツを自分の妻にしようとします。その法的手続きの様子が、ルツ記 4 章にあります。それを見ていて、証人となったのが、町の長老たちです。「4:11-12 門にいたすべての民と長老たちは言った。「私たちは証人です。どうか、【主】が、あなたの家に嫁ぐ人を、イスラエルの家を建てたラケルとレアの二人のようにされますように。また、あなたがエフラテで力ある働きをし、ベ

ツレヘムで名を打ち立てますように。12 どうか、【主】がこの娘を通してあなたに授ける子孫によって、タマルがユダに産んだペレツの家のように、あなたの家になりますように。」これは、明らかにルツから、メシアとなる男の子が現れますようにという祈りと預言です。事実、彼女からダビデが出て来て、ダビデからイエス・キリストが現れました。

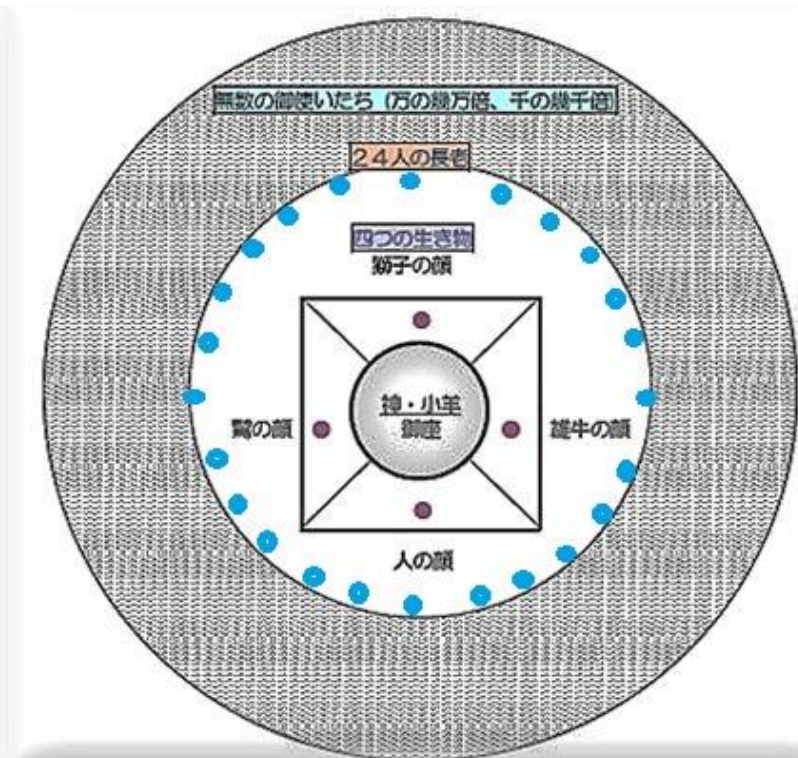
私たちは黙示録 5 章で、キリストが巻物を神から受け取り、この方が世界を贖うことになることを長老たちが目撃する場面を読みます。5 章での学びで詳しく見ていきますが、ルツ記は、神がキリストによって世界を贖うけれども、そのために教会を花嫁としていることを示していることを見えます。ここでは、長老たちがその場面を目撃し、その証人として立っているのだということです。

1

5a 御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。

4 章では、「御座」との位置関係、その前置詞が大事になりますね。ここでは、「から」という言葉が使われています。先は「周り」とありました。後で、「前」という言葉が使われます。それで御座がどのようになっているのかを想像できます。

ここでは、御座から「稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた」とあります。シナイ山のところに、天から主が降りてこられた時に、イスラエルが恐ろしくなったことを思い出してください。「出エジプト 19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」このような姿は、黙示録で 8 回も目にするようになります。



これは、主の聖なる姿を示しています。そして、主が畏れ多き方で、裁きも行われることを示しています。私たちに忘れられがちな、神のご性質です。私たちは、神をどうしても、自分と同じレベルに引き落とそうとする傾向があります。これこそが、サタンに誘いであると思うのですが、自分に理解できないことがあると、「神は、こんなはずはない。」とするのです。しかし、稲妻や声や雷鳴が轟いている時に、私たちは、圧倒的な力の差を抱いて、ただその自然の畏敬に、恐れひれ伏すのではないのでしょうか？神は、ご自身がそのような存在であることを示すために、稲妻や雷鳴でご自

<sup>1</sup> [http://meigata-bokushin.secret.jp/swfu/d/auto\\_kdo66n.pdf](http://meigata-bokushin.secret.jp/swfu/d/auto_kdo66n.pdf)

身を表すのです。「詩 29:3-10 【主】の声は水の上であり栄光の神は雷鳴をとどろかせる。【主】は大水の上におられる。4 【主】の声は力強く【主】の声は威厳がある。5 【主】の声は杉の木を引き裂き【主】はレバノンの杉を打ち砕く。6 それらの木々を子牛のようにレバノンとシルヨンをついで若い野牛のように跳ねさせる。7 【主】の声は炎の穂先をひらめかせる。8 【主】の声は荒野を揺さぶり【主】はカデシュの荒野を揺さぶる。9 【主】の声は雌鹿をもたえさせ大森林を裸にする。主の宮ではすべてのものが「栄光」と言う。10 【主】は大洪水の前から御座に着いておられる。【主】はとこしえに王座に着いておられる。」

そして、私たちが聖なる神を見上げ、また神の恐れ多き姿、その裁かれる姿を思いつつ歩むことが、勧められています。「神の聖なる姿、また恐れ多き姿」を知るということでしょう。ペテロが、第一の手紙でそのことを教えていましたね。「1:15-17 むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。16 「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。」

<sup>5b</sup> 御座の前では、火のついた七つのもしびが燃えていた。神の七つの御霊である。

「御座から」の次は、「御座の前」です。ヨハネは、この黙示録を七つの教会に対して、三位一体の神からのものであることを話していましたが、その時に、「神の七つの御霊」がおられました。(1:4-5)七つの御霊と言っても、その七は完全数を現わしていて、神ご自身の完全な御霊というような意味合いがあります。この方が遍く、すべてにおいて御霊によって臨在している姿を示しています。「詩 139:7 私はどこへ行けるでしょう。あなたの御霊から離れて。どこへ逃れられるでしょう。あなたの御前を離れて。」神が天地を造られる時も、まず「神の霊」が大水の面を動いておられて、それから「光、あれ」と言われました(創世 1:2-3)。

ここでは、この方が、「火のついた七つのもしび」として現れておられます。エゼキエルが、御座のそばにいるケルビムの幻を見た時に、「1:13 それらの生きものの姿は燃える炭火のようであり、たいまつのように見えた。火がそれらの生きもの間を行き来していた。火には輝きがあり、その火から稲妻が出ていた。」とあります。これは、主なる神がこれから地上に裁きを行われるのですが、それに当たり、御霊が火となって現れておられる姿です。聖霊によるバプテスマの約束、バプテスマのヨハネは預言しましたが、その時に、聖霊がバプテスマだけでなく、火によるバプテスマも授けることを話しましたね。「マタ 3:11b-12 その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

### 3B 四つの生き物 6-7

<sup>6a</sup> 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。

御座の前にある、水晶のようなガラスの海です。これは、一体何なのでしょう？黙示録の中では、15章2節にも登場します。「私は、火が混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々が、神の豎琴を手にしてガラスの海のほとりに立っていた。」神が地上に火による裁きを行なっているのですが、ガラスは透明なので、その火の様子が天にも届いています。昔は、王が自分の玉座の前に、似たようなものを作っていました。王とその臣民と隔てるためにそうしていました。それによって王が民とは超越していること、絶対的な主権を持っていることを示していました。

主なる神が天地を創造された時に、すでにそのような空間、「大空」を造っておられました。「創1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。」この大空、あるいは空間の上に主の御座があることが教えられています。先ほど読んだ、長老たちがシナイ山に集まって来た時も、「御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。」とありましたね。エゼキエルがケルビムの幻を見た時も、そうでした。「1:22 生きものの頭上には、まばゆい水晶のような大空に似たものがあり、頭上高く広がっていた。」そして26節です、「彼らの頭上、大空のはるか上の方には、サファイアのように見える王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。」このような、透き通ったような大空を、天においては「海」とも表現しているのです。ソロモンの神殿に、全焼のいけにえを献げる祭司たちを洗い清める、「海」と呼んでいます(Ⅱ歴代4章)。

このようにして、主の御座の周りに、裾野とでも呼んでもよいでしょうか、これが水晶のよう、ガラスの海のようにあり、神の超越した姿、その絶対的な主権を示しているのです。被造物とは混じることのない聖さも示しています。

<sup>6b</sup> そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。<sup>7</sup> 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。

「御座のあたり、御座の周りに」とありますが、おそらく、長老たちよりも御座に接近しているところでしょう。この姿を見ていますと、二つの幻が重なっています。一つは、エゼキエル1章と10章に出てくるケルビムの姿。次は、イザヤ6章に出てくるセラフィムの姿です。せっかくだから、エゼキエル1章の一部とイザヤ6章の一部を読みましょう。まず、エゼキエル1:4-21から：

<sup>4</sup> 私が見ていると、見よ、激しい風が北からやって来た。それは大きな雲と、きらめき渡る火を伴い、

その周りには輝きがあった。その火の中央からは琥珀のようなきらめきが出ていた。<sup>5</sup> その中に生きもののようなものが四つ現れ、その姿は次のようであった。彼らは人間のような姿をしていたが、<sup>6</sup>それぞれ四つの顔と四つの翼を持っていた。<sup>7</sup> その足はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏のようであり、磨かれた青銅のようにきらめいていた。<sup>8</sup> その翼の下から人間の手が四方に出ていた。また、その四つの生きものの顔と翼は次のようであった。<sup>9</sup> 彼らの翼は互いに触れ合っていて、進むときには向きを変えず、それぞれ正面に向かってまっすぐに進んだ。<sup>10</sup> 彼らの顔かたちは人間の顔で、四つとも右側には獅子の顔、四つとも左側には牛の顔、さらに四つとも鷲の顔を持っていた。<sup>11</sup>これが彼らの顔であった。彼らの翼は上方に広げられ、それぞれ、二つは互いに触れ合っていて、もう二つはそれぞれのからだをおおっていた。

<sup>12</sup> 彼らはそれぞれ前を向いてまっすぐに進んだ。霊が進ませるところに彼らは進み、進むときには向きを変えなかった。<sup>13</sup> それらの生きものの姿は燃える炭火のようであり、たいまつのように見えた。火がそれらの生きものの間を行き来していた。火には輝きがあり、その火から稲妻が出ていた。<sup>14</sup> それらの生きものは、閃光のように出たり入ったりしていた。

<sup>15</sup> 私がその生きものを見ていると、それら四つの顔の生きもののそばには、地の上にそれぞれ輪が一つずつあった。<sup>16</sup> それらの輪の形と作りは、輝く緑柱石のようで、四つともよく似ていた。それらの形と作りは、ちょうど、輪の中に輪があるようであった。<sup>17</sup> それらは四方のどの方向にも進み、進むときには向きを変えなかった。<sup>18</sup> その輪の周りの縁は高さがあるて恐ろしく、四つの輪の周りの縁は一面、目で満ちていた。<sup>19</sup> 生きものが進むときには輪もそのそばを進み、生きものが地上から上がるときには輪も上がった。<sup>20</sup> これらは霊が進もうとするところに進み、輪もまたそれらとともに上がった。生きものの霊が輪の中にあつたからである。<sup>21</sup> 生きものが進むときには輪も進み、生きものが止まるときには輪も止まり、生きものが地上から上がるときには輪も上がった。生きものの霊が輪の中にあつたからである。

それでは、次にイザヤ書 6 章です、「6:1-3 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、2 セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、3 互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」

覚えていますか、幕屋においても、神殿においても、契約の箱の蓋、宥めの蓋には、ケルビムが彫られていました。ケルビムは、エデンの園でもその東の入口を、炎の剣を持って守っていたし、「ケルビムの上に座しておられる方」と、詩篇にも出ています(99:1 など)。この四つの生き物は、ケルビムでもあるし、けれどもセラフィムの特徴もあり、ヨハネの幻には重なって与えられたのかもかもしれません。分かりませんが、どちらの特徴も持ち合わせていることを知るのが大事でしょう。これから、天において礼拝や賛美の導き手となっている姿を見ます。

まず、「前もうしろも目で満ちた」という特徴があります。エゼキエルの見た幻には、輪があって、その輪の周りの縁に目が一面に満ちていました。これは、要は「見ている」姿です。主ご自身が。万物を支配されている中で、絶え間なく、被造物の世界を見張っておられることを表しています。ヨハネがこの啓示を受け取った時、パトモス島にいたことを思い出してください。アジアの七つの教会に対して語っておられることを思い出してください。ローマによる激しい迫害の下にいました。そうした苦難の中でも、主はすべてを見張っておられることを知るのは慰めです。

そして、それぞれの顔があります。エゼキエル書 1 章には、一つのケルブに四つの顔がありましたが、ここではそれぞれ一つの顔です。天における情景なので、同じケルビムでも、その見た角度によって、あるいはケルビムが様態を変えるのかもしれませんが。そして、それぞれの意味ですが、最も考えられるのは、「被造物の長」だということです。獅子は、獣の中での長です。そして雄牛は、家畜の中での長であります。そして人間はもちろん、神のかたちに造られた被造物の長です。それから、鷲は鳥における長です。初代教父は、これを四つの福音書の特徴であると話してきました。獅子はマタイの描く王なるキリスト、雄牛はマルコの描く僕なるキリスト、人間はルカの描く人としてのキリスト、鷲はヨハネの描く神の子としてのキリストということです。ケルビムに、キリストの栄光が反映されているということでは、そうなのかもしれません。けれども、創世記 1 章における、神の天地創造の栄光を表しているのではないかと思います。神が、それぞれの生き物を造られて、ご自身のかたちに造られた人がいる、ということです。

### **3A 礼拝 8-11**

そして四つの生き物また二十四人の長老が、御座の前で礼拝している姿を見ます。

#### **1B 永遠に生きておられる方 8-9**

<sup>8a</sup> この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。

四つの生き物には、六つの翼があります。エゼキエル書 1 章のケルビムは、四つの翼でしたが、イザヤ 6 章のセラフィムが六つの翼を持っています。これは、二つで飛び、二つは体を覆い、二つは天に上げるために用いられます。まさに、礼拝の姿です。

<sup>8b</sup> そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」

「昼も夜も休みなく言い続けていた」ということは、天において疲れることはないことが分かります。主は疲れる方ではなく、まどろむこともない方です。「詩 121:4 見よイスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。」私たちは、肉体の休息は必要です。けれども、霊においては、絶えず、まさに心臓の鼓動のように、主を礼拝してやみません。「I コリ 10:31 こういうわけで、あなた

がたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

「聖なる、聖なる、聖なる」というのは、神の聖さを強く強調しています。先ほど読んだイザヤ書ではセラフィムが、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」と叫んでいます。神はすべての汚れから隔絶された方であり、被造物と混じることは決してありません。三つ並べて神を呼びかけるのは、ヤコブがヨセフを祝福する時も、アロンがイスラエルを祝福する時もありました。三位一体の神が反映されているという人々もいます。いずれにしても、神は決して、私たちのような非被造物とは混じ合うことはないことを示しています。イエス様が、肉体を取られても、らい病人に触れて、らい病が清められこそすれ、らい病が移ることはありませんでした。不道德の女がイエス様の足に触れましたが、彼女の罪が赦されましたが、イエス様が汚れることはありませんでした。圧倒的な聖なるお姿は、人を聖めても、ご自身は汚されることはないのです。

そして、「主なる神」と呼んでいます。この神こそが主権を持っておられます。エゼキエル書では、いろいろな裁きが地上に降っていく時に、また回復がなされるところで、「これらのことによって、わたしが主であることをあなたがたが知る」と、何度となく言われました。いろいろなことが起こっても、それはこの方こそが主である神なのだということを知るために、起こっていることなのです。

そして、「全能者」です。聖書全体に貫かれている神のご性質ですが、黙示録では特に、この呼び名が神に使われています。どんなことが起こっていても、主は必ず、はるかにすぐれた力をもって、それらの勢力を滅ぼすことができになります。再び、彼らがローマの圧政の中に苦しんでいることを思い出してください。詩篇 2 篇には、神が、ご自身とキリストに反抗する国々が一つになって集まっている時に、「2:4-5 天の御座に着いておられる方は笑い主はその者どもを嘲られる。5 そのとき主は怒りをもって彼らに告げ激しく怒って彼らを恐れおののかせる。」とあります。

こうして聖なる方であられ、主であられ、全能である方が、「昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」であります。この方が、初めから支配者であられ、今も、そして将来に至るまで支配しておられます。永遠の王なのです。地上の王は倒れます。けれども、この方は決して倒れることはありません。永遠に御座におられる方です。この呼び名も黙示録には数多く出て来ます。イエス様は、「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。(ヨハネ 8:58)」と言われましたが、それは、モーセに主が現れた、「わたしは、『わたしはある』という者である。」と言われたことを意識しておられたものです。わたしはいた、ではなく、わたしはある、のです。「永遠の福音」という言葉が 14 章 6 節にあり、また、いのちの書が「世の初め」から書き記されていることが 13 章 8 節に書かれています。そして、神の御国についても、「主は世々限りなく支配される(11:15)」とあります。

これら聖なる方、主なる神、全能者、そして永遠に生きておられる方、この方が御座におられるというのが、黙示録の強調している、私たちの主の姿です。そしてイエス・キリストがこの方と一つで



あるということを示しているのも黙示録です。

<sup>9</sup> また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげるとき、

「栄光と誉れと感謝」を献げています。「栄光」というのは、もともとは「重さ」という意味ですが、重力のように、重いところに物が引き寄せられます。同じように、神ご自身にすべての原因や目的が集められるときも、それが栄光となります。パウロは、ロマ書で「11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と言いました。そして「誉れ」となるものも、主にお返しし、感謝も捧げます。そしてこの四つの生き物に呼応して、二十四人の長老も礼拝します。

## 2B 栄光と誉れと力 10-11

<sup>10</sup> 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。

三つの動きをしています。第一に「ひれ伏す」ことです。これは、自分の思いや願い、全てのことを主なる神に服従することです。私たちはあまりにも、自分の権利を当然と考えて、自分の思いや願いを第一にすることを主張します。いいえ、主に対して従順であること、服従することが全ての中心なのです。次に、「礼拝」します。拝む、と言ったらもっと分かり易いです。自分の靈魂のすべて、人格のすべてを相手に明け渡してしまうことです。魂を売り渡してしまった、という悪い言い方がありますが、私たちは善なる方に、自分の魂を明け渡してしまうのです。

そして、三つ目に、「冠を・・・投げ出」すことがあります。冠は、自分が神から与えられた報いである栄光でありました。それを主なる神の前では、全て投げ出してしまいます。私たちのものでは、元々ありませんから、主なる神には栄光や報いは投げ出すのです。これが礼拝の姿です。ダビデが、ペリシテ人と戦って、部下である三人の勇士がベツレヘムから持ってきた水を、土に注いでしまいました。また、マリアはイエス様が十字架に付けられる前に、高価な香油を主の足に注いでしまいました。自分のものに固執しない、主の御心であれば何でも投げうって渡してしまう姿です。

<sup>11</sup>「主よ、私たちの神よ。あなたこそ 栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」

ここが、私たちの礼拝者としての姿勢、その模範を表しています。「主よ。われらの神よ。」という「主」はもちろん、主人、あるいは自分が服従する相手です。この方が自分を支配する存在であることを認めることです。次に、「神よ」とありますが、神とは名前ではなく、「自分を突き動かす情

熱」と言い換えても良いかもしれません。自分が行なっていることを、行なわせているその情熱は何なのか。何が自分を突き動かしているのか？そして、この方が、「栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」ということです。すべてのことは、神の栄光のためにあります。すべての功績は神にあるので、誉れも神にあります。そして、神こそが全てをことごとく動かす力を持っておられます。

そして、「あなたが万物を創造されました。」であります。この真理を受け入れていかないというのが、罪の始まりであり、終わりの日に裁かれる罪です。黙示録に強調されているところであり、ラオディキアの教会は、万物の根源である方を認めず、自分自身で間に合っているという態度を取っていました。そして大患難の時には、すべてを神が支配していることを最後まで認めない、悔い改めていない姿が出てくるのです。「16:9 こうして人々は激しい炎熱で焼かれ、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」

そして、万物を創造されただけでなく、「みこころのゆえに、それらは存在し、また創造された」ということです。ここでのみこころは、「あなたの喜び、好み」と訳すことができます。主がご自分の願われているように、思いのままに、ということです。つまり、神は私たちが喜ばすために存在しているわけではありません。ご自分を喜ばすために、私たちが存在しているのです。自分が喜ぶのではなく、神が喜ぶためです。

これが、ある意味、今の世において、最も嫌われる真理ではないかと思えます。つまり、自分の幸せ、自分の喜び、自分の選択、自分のもの、こうやって自分の権利を主張することこそが、最も正しいこととされています。しかし、万物の根源は神にあり、私たちはこの方に造られたのであり、自分の幸せでなく、神ご自身の喜び、自分の選択ではなく、神の主権の選び。自分の所有ではなく、神の所有。このことを認めて、ひれ伏し、服従するところに、結果として私たちの魂は喜び、平安になり、安心するのです。今、黙示録が本当に読まれて、それを守ることによって幸いを得なければいけない時代に生きているでしょう。人忠心ではなく、神中心の世界で生きていくために。

今回は、神中心の天ようになっていない、この地上で、世にいる者たちを贖い出すためにキリストが行われた御業について見ていきます。そして、この方が成し遂げられた贖いによって、天が再び賛美に満ちる姿を見ます。